

## 編集にあたって

宮下和夫

吉本（隆明）さんにとって、講演とそれに続く質疑応答は、一種独特の意味を持っていた。ひとは、新たな表現活動として、またひとつは、外部をのぞく窓口として。初期の頃には、講演は苦手だ、という意識もあって、数も多くなかったが、一九六〇年代後半になると、学生を中心に要請も多くなり、相当意識した講演を行うようになってきた。そのあたりのことを、最初の講演集である『情況への発言』あとがきで、こう書いている。

「この講演はわたしが外部をのぞく唯一の窓口であった。わたしは学生諸氏の質問や批判や反撃をうけとり、いいかえれば手応えの質がどこにあるかをうけとり……」（一九六八年八月）

次の講演集では、こう書いている。

「かつて、戦争中から戦後にかけて、わたしは一人の何でもない読者として傾倒していた幾人かの文学者がいた。かれらが、この情況で、この事件で、どう考えているかを切実に知りたいとおもったとき、かれらは、自分の見解を公表してくれず、沈黙していた。もちろん、それぞれの事情はあったろうが、無名の一読者としてのわたしは、いつも少しづつ失望を禁じえず、混迷にさらされた。もしも、わたしが表現者として振舞う時があったら、わたしは、わたしの知らない読者のために、自分の考えをはっきり述べながら行こうと、そのとき、ひそかに思いきめた。たとえ、情況は困難であり、発言することは、おっくうであり、孤立を誘い、誤るかもしれないとも、わたしの知らないわたしの読者や、わたしなどに関心をもつこともない生活者のために、わたしの考えを率直に云いながら行こうと決心した。それは、戦争がわたしに教えた教訓のひとつだった。わたしは、まだ、この教訓を失っていない。(中略) わたしの読者は、まだまだわたしが〈情況〉を失っていないと信じてくれて結構であり、〈情況〉が大切なところで、わたしの判断や理解の仕方を知ることができはらずである。手に負えなくなったら、ちゃんと手をあげるだろう。まだ、大丈夫だ。」

〔『敗北の構造』あとがき、一九七二年十二月〕

これは、書くものにも喋るものにも共通する吉本さんの姿勢であった。

書く寸前、と云っていいものが増えてきて、準備にも一週間くらいかけることも増えてきた。当然、レベルも高くなってきて、例えば、厳選された全集である「吉本隆明全集撰」には、「良寛

論」三編（「思想詩」「僧侶」「隠者」）が収録され、小林秀雄賞を受けた『夏目漱石を読む』は、全て講演である。多くの講演が、いろんな媒体によって公表された。学生新聞に載ったものもある。二回、三回と活字になるものも多かった。

講演について、正面切って触れたことが、前記以外に二度ほどある。一度は講演中の発言において。「僕は常日頃、じぶんのおしゃべり自体をひとつの作品にするつもりでしゃべっています。作品になっっているかどうかは聞かれた方の受けとり方なので、僕の云うべきことに属さないのですが、あのとき〔直前に行われた「若い現代詩」という講演を指す〕だって僕は諸先生方が書かれている詩を素材にしてじぶんがひとつの作品をかくというつもりでしゃべったのであって、あれを作品として読んでくださらないかというのが僕の願望なんです。」（『若い現代詩』について）一九八二年十二月）

これほど昂然と自分の講演について語ったことは、後にも先にもない。  
もう一度は、「吉本隆明全講演ライブ集」のチラシに書かれた。

「人まえて喋るのは苦手だと言いながら、書き手のなかではよくお喋りしているほうではないかとおもう。喋言ることでは他人に通じないという思いから書く手習いをはじめたと思ひ込んできたわたしには、ある時から講演とかインタビューとかを、書くことの方へ近づけようという意識的な修練を心がけたことがあった。そのために幾つかの試みを課した記憶がある。苦手の意識をふり払うため、というのがそのモチーフの主なものだった。聴かれた人がわたしのこのモチーフに気づ

かれたことがあるかどうかは判らない。……」(二〇〇一年十月)

\*

講演がこのようなものであったとしたら、質疑応答はどのようなものだったのだろうか。吉本さんはどこかで、「ふきっさらしの壇上で……」というようなことを書かれていたように思うが、それは講演のことではなく、質疑応答を指すのではないだろうか。四方八方から、あらゆる質問が飛んできて、それに間髪を入れず答えていく。この、間・髪というのが凄いのだ。質問についての理解が早いというか、深いのだ。

あるいは、質問の趣旨が分かりにくいとき、何度も問い返し、「そうか、だいぶん分かってきました。あなたの質問される核心が分かってきました。」というように、丁寧に質問を解きほぐしていく。また、吉本さんは質疑応答を重視していて、時間のあるかぎり続けようとした。だから、場合によっては、講演より質疑応答のほうが長くなることもあったし、質疑応答をメインにした企画まで飛び出したほどだ。それは、大阪・梁山泊主催の「ハイ・イメーヅ論199X」だ。「吉本隆明全講演ライブ集」冊子での換算だが、講演二九ページに対して、質疑応答四四ページだった。

本シリーズは、音源のあるものと活字あるいは起こし原稿だけが残っているものと二通りある。音源のあるものでも、吉本さんの答えのほうはマイクがあるためクリアなものが多いが、質問のほうはマイクがないため聞き取りにくい。可能な限りおこしたが、不明箇所は□□□としたり、「聴

取不能」としたのも多い。

音源のないものは、学生が起こしたものが多く、正確なものかどうか分からない。だから、本シリーズでは、あまりに不確かなものは落としたり、落とすのをためらわれるものは、「参考資料」として文字を小さくして収録した。音源で確認できるものを主にしたということだ。

このような質疑応答だが、人目に触れることはあまりなかった。いくつかの講演記録が冊子などの形で公表されただけだったが、近年になって高知の松岡祥男氏編集の「吉本隆明資料集」（猫々堂発行）が二十回ほど掲載している。これは、先行業績として貴重なもので、本シリーズでも恩恵を受けた。

今回、このような形で発表するきっかけは、「NHK戦後史証言プロジェクト」が行なった「シリーズ・日本人は何をめざしてきたのか・第5回 自らの言葉で立つ 思想家・吉本隆明」（二〇一五年一月、放映）で取材された際、カセットテープの山を見せながら説明している時、ふつとこのなかに砂金が隠されているぞ、という閃きがあった。それが、この「質疑応答集」の企画の始めである。

吉本さんの講演は、内容が不明でも記録として分かっているものを含めて、三五一講演がある（「吉本隆明〈未収録〉講演集」の付録「吉本隆明全講演リスト」）。刊行中に見つかり収録されなかったものが四講演ある）。

このうち、一八三講演を、東京糸井重里事務所（現・ほぼ日）のインターネットサイト「ほぼ日刊イトイ新聞」が、「吉本隆明の183講演」として、無料・無期限で公開している。このことは、凄いいことだと思う。一私企業が、一八三もの膨大な講演を無料で公開しているのだ。講演も質疑応答もある。ぜひ、それを聴いて欲しいと思う。吉本さんの、活字では伝わらない息吹きを感じられることだろう。

解説を担当された築山登美夫さんは、不明箇所を中心に、何度も音源に当たられた。例えば、起こしが、「柳田国男は西欧的な自然に関心を示さなかった。」とあったのは、築山さんの聞き込みによって、「柳田国男は制度的な視線に関心を示さなかった。」の誤りであることが分かった。このような例は、枚挙に暇がなかった。築山さんは吉本さんの文章に精通している詩人であり、校閲のプロである。築山さんの不明箇所への聞きこみによって明らかになったことも多い。

また、「解題」で宿沢あぐりさんの協力を得た。記して感謝の念にかえます。

初校では、全体で二〇〇〇ページを超えた。これは、質疑応答として、空前絶後のことではないだろうか。精読に足る内容が詰まっていると思う。珠玉の言葉もあるだろう。また、どこからでも読み込めると思う。漫然と読んでも、発見があるだろう。ご精読を乞います。

（みやした・かずお）

# 『最後の親鸞』以後

一九七七年八月五日

真宗大谷派学校連合会主催による講演後

質問者 1

先生が親鸞に興味をお感じになりましたきっかけがありましたら、うかがいたい

んですが。

僕は昔から親鸞が好きでして、学生の頃に「歎異鈔たんにしやうに就いて」という文章を書いたこと  
もありません。その関心が現在まで持続しているわけです。では僕は、親鸞のどこが好きな  
のか。みなさんはそうじゃないと思うんですが、宗教を信じている人にはいい子になりた  
いという気持があるんですよ。そして僕自身にも、自分を偽ってでも正しいことをいいた  
いという気持があると思うんです。ところが親鸞は、人間は正しいことをいうためになぜ

自分を偽らなきゃいけないのか、ということをや非常によく考えて、自分を偽ることと正しいことをいうことの間には橋を架けたような気がするんです。

この二つの間に橋が架かっている宗教家、思想家はほとんどいません。たとえばマルクス主義者でも、「おまえ、いいことじゃないの」というのと、「おまえ、インチキじゃないの」「おまえ、こういう悪いことしてるんじゃないの」ということの間にはちゃんと橋が架かっている人はいません。これは国にかんしても同じです。中国やソ連をマルクス主義を理念とした国だと呼ぶでしょう。でも実際にはこれらの国の現実はちっともよくないから、「おまえ、嘘をつくなよ」ということになる。理念は立派だけど、まったく内実がともなっていない。

これは僕の考えですけど、もしほんとうの思想がありうるとすれば、国家として共同体として組織として、あるいは自分として自分の内面に嘘をついているということと、正しいことをいうことの間には橋が架かっているかと思ふ。親鸞の思想には、橋が架かっている。橋が架かっている思想を、僕は信じないわけですよ。そもそも僕は、正義なんて信じていない。理念的に正しいことをいうのはやさしいことです。人間は、そんなのは、ちよつとでも知識・教養があればできるんですよ。僕はそう確信します。しかし、



そんなことはたいしたことじゃないと思います。

自分に嘘をついていることと、正しい理念というものと、両方に橋が架かっているというところが、非常にたいせつなことだと思います。それがなければ、思想はゼロに等しいというのが僕の考えです。上代から現在まで全部合せてでもいいですけど、僕には、日本の思想家のなかで親鸞だけが、程度はあるでしょうけれど、そうしているように思えてしかたがないのです。

僕は学生の時から親鸞が好きでしたが、けっして信仰者ではないんです。僕の家は浄土真宗ですが、もともとは天草あまくさの門徒だったので、皆さんとはちがって西本願寺派なんです。よ。こっちに來てからは佃島つくだじまに住んでいましたから、佃門徒ですけどね。親父とおふくろと、その祖父は信仰あつの篤い人だったんですが、僕はそうじゃなくて不肖の子です。でも、子供の頃から無意識のうちに、「白骨の御文章」を聞いているだろうから、それが入っているだろう、といわれたりします。たしかにやさしいから入っていますし、感性的にはあるかも知れませんが、なぜ関心をもったのかは、ほんとうは、それですね、僕は。

質問者 2

いま、正しいことをいう自分と嘘をつかなければならない現実の自分との間に橋

を架ける思想こそがほんものであり、親鸞はその橋を架けた第一人者であるとおっしゃいました。先生はその橋を、本願念仏として捉えておられるのでしょうか。それともさつきいっておられたように、自由意志によって人間は動くものではないという思想として捉えておられるのでしょうか。

僕のばあいは、思想として捉えています。橋を架けるといふことの意味ですけれど、現世流の言葉でいえば、自分の主体的な思想として、少なくとも自分が正しいことをいうばあい、「こういう言い方しかできないよ」というかたちで主体的に橋が架かっていなきやいけない。つまり自分のなかで、嘘をつく自分と、正しいことをいう自分との間に、よく考えられていなければならぬ。自分は、ここところは嘘で、ここところはいいつでもごまかしやすいんだなという問題が、主体的に突きつめられていなきやならない。もうひとつは、理論的にといつたらおかしいでしょか、理念的にあるいは教義的に突きつめられていなければならぬ。だから、その三つの意味あい突きつめられていなきやいけないと僕は思いますけどね。

質問者 3

先ほど、親鸞は積極的に悪を造るとおっしゃっていたと思うんですが、そのことについて質問があります。□□□には二つの意味がある。その二つの意味についての□□□があつて「このあたり聞き取れず」。親鸞は「僧に非ず俗に非ず」と宣言し、愚禿と名のりましたね。そういう意味では、本来的に聖者の道、出家の道を捨てた。しかしそこには積極的に悪をなすことにもつながるような、精神的境位があるように感ずるんですけど。先生は、非僧非俗と自然法爾のつながりをどのように捉えておられますか。

もし親鸞が聞ききとおり、「僧に非ず俗に非ず」という言葉を使ったとすれば、それはどこから来たのか。永観の『往生十因』という本に、賀古川（加古川）に住んで念仏三昧で暮らした教信というお坊さんについて書かれています。教信という人は、当時の世捨て人のなかでもきわめて特異です。当時の世捨て人は、たいてい山野やどこかの別所に隠遁して、托鉢をして回った。そういうふうには、なんらかのかたちで比叡山・高野山につながる。一方で教信はかつて天台宗の碩学といわれた人なんですが、世を捨ててからの生活のしかたがまったく違っていった。彼は他の世捨て人と一緒に住まず、賀古川へ

流れていってそこに居を構えた。そして農家で畑を耕すのを手伝ったり、旅人の荷物を運んだりして口銭こうぜんをもらう。そういうふうにして食べていたんです。

『往生十因』では教信のことを描写するとき、「僧に非ず俗に非ず」という言葉を使った。親鸞は『往生十因』を読んでいるわけですよ。それから教信というのを、「我は是れこゝ賀古の教信沙弥しゃみの定じょうなり」、つまり自分の模範だといつもいいつつけていた、と『改邪鈔』に出ています。

だから「僧に非ず俗に非ず」というばあいには、「僧に非ず」ということのなかには、ひとつは生き方の問題があります。ふつうの人がやる職業と同じことをしている。そういう具体的な意味がある。もうひとつは、僕は怒られちゃったんだけど、親鸞は流されて北陸道にいた時は一念義いちねんぎ主義者で、法然にやられたほうに近かったのではないかと思うんです。法然が「北陸道ほくろくどうに一の誑きやう法の男おとこがいる」と論難ろんなんしている文章が残っています。法然に論難ろんなんされている人がだれなのかはわかりませんが、当時の親鸞の考え方はそれとたいへんよく似ていたんじゃないか。法然は「七箇条しちかじょう制誠せいせい」で、夜に何とかを食っちゃいけないとかいろいろと戒いましめています。それからすると、親鸞は論難ろんなんされる側に近かったのではないか。僕にはそう思えるところがあるわけです。

しかし親鸞が赦免されて関東に行ったとき、どんな恰好かっこうで何をしていたのかについては具体的なイメージが湧いてこない。布教したり弟子たちに語ったりしている親鸞、つまり現象としての親鸞は、あなたがおっしゃる「非僧非俗」に近かったのではないかと思ってるんですけどね。

先ほどもいいましたように、親鸞がもっていた理念には本質論も含まれています。『教きょう行ぎょう信しん証しょう』がいつ書かれたかということは非常に大きな問題ですが、これが関東時代にすでに筆記・整理されていたことはだれにでも推測できます。京都に帰ってからは、弟子たちに教義的な書簡を送ったり、教義的な文章・解説を書いたりしているわけですが、思想的なベースはすでに関東時代に確立されていた。そして親鸞は関東時代、先ほどいった教信と同じような生きざまをしていたのではないか。「僧ひげに非ひず」ということでふつうの人とほぼ同じような恰好をし、働いて日銭ひげにを稼かせぎつつ生活していたのかもしれない。教信は黒い袈裟けさなんか着ないし、お経も持っていない。さらには寺も建てず、本尊も飾らない。彼はふつうの人と同じような家に住み、念仏とんを称とえていた。もちろんそっくり同じとはいいませんけど、それと非常に近いかたちで生活していたのではないか。「非僧非俗」というばあい、僕はそういう理解のしかたをとりますね。

質問者 3

そういう生き方をするには、大きな資格が要るわけですね。

ええ、僕もそう思います。親鸞の生き方というのは、ひとつの思想として捉えればいいんですよ。ですから、僕はどうしても、親鸞は晩年になって自然法爾という信仰的境地に到達したという言い方をしたくないのです。そうではなく、親鸞は、「自分はほんとうに老いぼれちゃったよ。あんまり難かしいことは浄土宗の学者に聞いてくれ」といっているような気がするんです。僕は親鸞を信仰の人としてではなく、あくまで人間として捉えたい。だから、できるだけ自分の考え方のほうに引き寄せて親鸞像をつくりたいし、実際にそのようにつくってしまいますね。

質問者 4

晩年の親鸞は自然法爾という境地に達したわけではなく、自らの老いをまっすぐに受けとめていた。先生は親鸞を、あくまで人間として捉えたいとおっしゃっていました。しかしその一方で「唯信鈔文意」や「一念多念文意」を書き写し、田舎の同行たち<sup>どうぎょう</sup>に送っている。つまり体力の続くかぎり、宗教者としての活動を続けてい

たわけですが、このことはいったい何を意味しているのかなと。

先ほどは、親鸞教団にとっての最大の危機にたいして、親鸞としてはどうしてもそうせざるをえなかったんだということを、強調しすぎたかも知れませんが、そういうことがたいへん重要なモチーフではないでしょうか。そこで自分の考えをじかに述べてもいいんだけど、それよりも先達の文章を書き写して、これを読んでよく考えてくれという言い方を時々していますけれども、それが大きな要因じゃないかなと思います。

親鸞は弟子たちを教育し、問題を解いていかなければならなかったわけですが、その一方で、死ぬまで自分の考えを深めていきたいという強い願望をもっていました。これは生きざまといっても過言ではない。僕もまた、死ぬまでそういう生きざまを貫きたいんですね。これは問題を解く、弟子を教育するということとはちがうですよ。それとは関係なく、できるならば、死ぬまでは少しでも先に行きたい。「先に行つてどうするの」といわれても、目的なんて何もないんですよ。死ぬば死にきりで、そこで終ります。終りという怒られちゃうけど、僕は終りだと思っています。死ぬば死にきりで「あれ、何もないよ」ということになるんだけど。

「何のために人間は先に行かなくやいけないのか」といわれたら、人間というのはそういう逆説的な存在なんだよという以外にない。何の役にも立たないし、だれが聞いてくれるわけでもないし、だれがそう信じてくれるわけでもないし、どこに同志がいるわけでもない。だけど、死ぬまでは一歩でも先に進みたい。人間てのは悲しいねえ、という感じが僕はしますね。人間というのはそういう存在なんじゃないでしょうか。親鸞が「唯信鈔文意」や「自力他力事」じりきたりきのことを書き写して弟子たちに送っていたのは、人間として少しでも先に進みたいという強い願望があったからではないか。いわゆる教育、問題解決のためではない。自分の考えをほんとうに理解してくれる人がだれ一人いなかったとしても、人間はそうせざるをえない。だから親鸞もそうしたのであるというのが、僕の理解のしかたですね。あなたのおっしゃったことにたいする僕の答えはそうなります。

僕は今五十幾つだからあと幾年生きるのか、あと十年も生きちゃうのか知らないけれども、死ぬまではやっぱり少しでも先に進みたい。自分の考えを理解してくれる人がちっともいなくなると、そうせざるをえないでしょう。ですから、人間というのはある意味では非常に悲しい存在で、なおかつ非常に逆説的な存在でもある。考えようによっては、人間のないうることは全部むだなんですが、そうせざるをえないからそうする。それが人間と



いう存在なんですよ。

親鸞は八十歳を超えてもなお、そうせざるをえなかった。その当時の八十代は、今の八十代とはまるでちがうんですよ。平安朝時代の平均寿命は三十七歳ぐらいで、だいたい結核か伝染病で死んでいた。そんな時代に八十何歳まで生きていたら、化け物と同じですよ。それであんなものを書くんだから、「なぜそうするのか？ どうしてそうまでして生きなきゃいけないの？」という人もいるかもしれない。みなさんは教育的情熱・宗教的情熱をもち、いろいろな生き方をなさるでしょうけど、僕はそういうことはいわない。自分の考えを理解してくれる人がだれもいなかったって、死ぬまで一歩ずつ進んでいこうとする。人間というのはそういう存在なんですよ。だれがそれを促すのかはわからない。親鸞にもそれはわからないんだけど、人間である以上、死ぬまで一歩ずつ進んでいかざるをえなかった。僕はそう理解していますけどね。

質問者 5

先生は先ほど、宿業しゅくごうというのは善導ぜんどうよりも曇鸞どんらんがいつていることに近いとおっしゃいました。それについてもう少し詳しくお聞きしたいんですが。

みなさんのほうが専門家で僕は素人ですから、あまりそういうところには立ち入りたくないんですけどね。でもしょうがないから、与太話よたばなしでもしましょうか。

僕は戦争が終わった時にもうがっかりきて、本という本を全部売り飛ばして『国訳大蔵経』ぞうきょう（全四十八巻）というのを買ってきたんです。戦争が終わってから二年ぐらいそればかり読んでいたんですよ。でも読んだから理解したなんていうことはなくて、なにもわかりやしないんですよ。ただムードがわかるというだけで。その後、生活に困って金がかかったから、大部分は売り飛ばしてしまっただけです。今でも二十冊ぐらいは残ってる。とくに宗典部の第九巻、『日本支那浄土門聖典』にある『浄土論註』だけはよく読んでいます。大きなことをいうと怒られそうですが、『教行信証』のなかで「道德、善悪論」というのはやっぱりいいものですよ」というばあい、善導が引用されているのではないかと。そして実体論から本質論を展開しようとするとき、曇鸞の『浄土論註』が引用されているような気がしてしょうがない。これが僕の理解のしかたです。

『浄土論註』にはこんなことが書かれている。人間には生も死もないから、実体としての衆生しゅじょうというものは存在しない。つまり人間というのは、滅しない、でも永生でもない。親鸞は実体論から本質論を展開しようとするとき、なぜか曇鸞の『浄土論註』と近い考え

方を述べているように思われます。

質問者 6

親鸞は実体論から本質論を展開する時、曇鸞の『浄土論註』に近い考え方を述べている、その指摘は非常に興味深いと思います。僕たちは浄土三部経のなかでは『大経』（無量寿経）と『観経』（観無量寿経）を重視します。『観経』に宿業の問題が出てくるわけですが、その論理にとどまっていたのでは救いは完成しない。そこで本質論が出てくるのではないかと、僕なりに受けとったんですが。

僕は日本の浄土教義の歴史について多少調べたことがあります。たとえば源信げんしんは観相念仏を重視しました。信仰のない悲しさで正しくいいあてることができないんですが、ここでは浄土を莊嚴なところとしてつねに思い浮べることが修行のひとつになっていった。しかし日本の浄土教団は観相的な仏教あるいは善導の「観念法門」を離脱し、その考え方を否定していった。そして最終的には親鸞がいうように、色も形もないという境地にいたる。観相的な仏教においては、五感に訴えて浄土や仏、来迎らいごうのイメージを思い浮べる。しかし源信から法然、親鸞にいたるまでに、そのような考え方が徐々に否定されていく。これ

は日本の浄土教の歴史において、たいへん興味深いところであるように思えるんですけどね。もちろんこれを歴史的な過程とせず、現象論から実体論、本質論への変遷と考えることもできるでしょう。

親鸞はおそらく浄土三部経、『観経』『大経』『阿弥陀経』にかんして次のように考えていたのではないでしょうか。まず『観経』には他力のなかに自力的な要素があると書かれており、「観念法門」の余韻が感じられる。ここには、悟りのイメージを思い浮べることが修行につながるという考え方があつた。『阿弥陀経』では徳本・善本を重んじるため道德的なところがあるんですが、『大経』はそうではない。これは、他力という絶対的な境地と対応させて理解することもできます。

そしてもちろん、いまあなたがおっしゃったような理解のしかたもできるだろうと思います。ほんとうをいえば、現象論から実体論、本質論という段階を経たわけではなく、これらの相はたがいに重なり合っている。いちばん望ましいのは、これら三つの相がちゃんと重なり合ったところで、ある事柄を掴むことです。信仰にかぎらず、ある事柄の本質を掴むところがほんとうに重要な問題なのかもしれません。

# 親鸞の教理について

一九八〇年五月二十四日

上智大学東洋宗教研研究所・上智大学キリスト教文化研究所共催による講演後

司会者

皆さんのご質問のなかから二、三、まとまったものがございますので、少し紹介します。親鸞の最後の思想は日本的なものだったというお話がありました。が、はたして親鸞は生きていた時にすでにそれをもっていたのか。現在の私たちが日本的なものとして捉えるものは、親鸞によってつくられた。これに関連して、日本的とはいいたい何なのかという質問もございましたので、吉本先生にお答えいただければと思っております。

先ほど親鸞の自然（じねん・しぜん）という思想は日本的な要素をもち、なおかつ日本

解説

## 生成する「内在」

築山登美夫

一

宿沢あぐりさんと宮下和夫さんの労作「吉本隆明全講演リスト」（『吉本隆明〈未収録〉講演集』附録／筑摩書房二〇一四年）によると、吉本隆明さんは生涯に三百五十回ほどの講演をこなしており、その足跡は北海道、東北から九州、沖縄にまで及んでいます。これらのうち初期のものも多くは記録も音源もなく、内容を知ることができませんが、一九六〇年代の半ば頃からは、逆に多くが活字化されることとなります。宮下さんが徳間書店の若い編集者だった時代に編集された『情況への発言』（六八年）を皮切りに、講演集も数多く刊行されます。吉本さんの考えを、直接声を聴くこと

によって知りたいという講演企画者の熱意、労を惜まずそれに応えた吉本さんの熱意、またその場に立ち会って講演を録音し記録した編集者の熱意が合致したところに生まれた講演記録は、書き言葉の吉本隆明とはまたちがう、親密な感動と、切実な影響を、多くの読者にあたえてきたと思います。

そこで見逃してはならないのが、吉本さんが講演後の質疑応答にも存分の時間をかけ、力を入れていたことです。準備された講演と、聴講者の質疑に対する臨機応変の応答は、同じほどの重量をもっていたのです。このシリーズの編集にあたられた宮下さんが巻頭でふれられているように、これまで活字化されることは殆どありませんでしたが、それがいつかは公表されることを待っていたものであることは間違いないところだと思います。

この巻には宗教を主題とする講演後の、長短十六篇の質疑応答が収録されています。そのなかで、とりわけつよく印象づけられた箇所いくつかを、私にできる範囲で語ることで、解説の責めをはたせればと思います。

## 二

巻頭の『最後の親鸞』以後』という一九七七年の講演後の質疑応答では、親鸞への関心の理由

を問われて、

自分に嘘をついていることと、正しい理念というものと、両方に橋が架かっているということが、非常にたいせつなことだと思います。それがなければ、思想はゼロに等しいというのが僕の考えです。上代から現在まで全部合せてでもいいですけど、僕には、日本の思想家のなかで親鸞だけが、程度はあるでしょうけれど、そうしているように思えてしかたがないのです。

(p.5)

このように簡潔な断言がいきなり繰り出されます。「橋が架かっている」ということが重要なのであって、真実を叙べること、虚偽を叙べること、それじたいが問題なのではない。その間に橋の架かっていない「思想はゼロに等しい」。それができているのは親鸞だけだ。それに少しでも近づくことが私の願いなのだ——吉本さんはそう付け加えてもよかったです。

晩年の著書『日本語のゆくえ』（二〇〇八年）で吉本さんは、「自分と、それから理想を願望するもうひとりの自分とのあいだがどれだけ豊富であるかということ、これが自己表出の元であり芸術的価値の元である」と叙べられたことがあります。「あるがままの自己」と「あるべき自己」の間に、橋が架かっているかどうか、その関係をどれだけ豊かなものにできるかどうか。そのことが重



要なのであって、理想に近づけたかどうかが問題なのではない。それをとりちがえたり、混同したりする自己欺瞞に陥ることから、あたうかぎり逃れること。架かっている橋を見失わず、その關係を豊かに繁らせることが「自己表出」という行為であり、それが思想の、芸術の価値を生み出す源泉なのだ。

この間に三十年の時間が横たわっていますが、云われていることは一つで、吉本さんの思想の根柢を流れるものと云っていいと思います。

『日本語のゆくえ』の刊行後に行われた講演「芸術言語論」では、太宰治の「善蔵を思ふ」が印象的に語られていました。太宰は失敗ばかりしている主人公の語り手を造形し、その失敗のなかにある自己との対話を、皮膚の下を流れる血流のように縦横に廻らせませす。「太宰治はこの小説で、葛西善蔵という人は文学（芸術）の本質たる自己表出という問題に人生をかけて向き合っていたいへんな作家であるということを云っています」（『吉本隆明〈未収録〉講演集』12巻・二〇一五年）。ここでも「あるがままの自己」と「あるべき自己」の間に橋を架けること、その行為こそが自己表出で、太宰も、自分も、「人間としてぶっ壊れてるんじゃないかと思われるほど大胆な私小説を書いた」（同）善蔵も、その持続に身を挺してきたのだ。吉本さんはそう云いたかったのだと思います。

太宰には、こんな考え抜かれたアフォーリズムもありました。

《じぶんで、したことは、そのやうに、はつきり言はなければ、かくめいも何も、おこなはれませ

ん。じぶんで、さうしても、他におこなひをしたく思つて、にんげんは、かうしなければならぬ、などとおつしやつてゐるうちは、にんげんの底からの革命が、いつまでも、できないのです。》（「かくめい」・傍点原文）

「正しいこと」を云つて人を——読者を、民衆を、啓蒙しようとするだけの言説が、どれほど自らを欺いたところに成立しているか、「にんげんの底からの革命」から遠いか、思想として「ゼロに等しい」か。吉本さんが亡くなったあと、まるで歯止めを失つたかのように、そんな言説が氾濫しているように見えるのは私だけではないだろうと思います。

それとも関連するのが、次の応答です。

親鸞は弟子たちを教育し、問題を解いていかなければならなかったわけですが、その一方で、死ぬまで自分の考えを深めていきたいという強い願望をもっていました。これは生きざまといても過言ではない。僕もまた、死ぬまでそういう生きざまを貫きたいんですね。これは問題を解く、弟子を教育するということとはちがうんですよ。それとは関係なく、できるならば、死ぬまでは少しでも先に行きたい。「先に行つてどうするの」といわれても、目的なんて何もないんですよ。死ねば死にきりで、そこで終ります。終りという怒られちゃうけど、僕は終りだと思つています。死ねば死にきりで「あれ、何にもないよ」ということになるんだけど。

「何のために人間は先に行かなきゃいけないのか」といわれたら、人間というのはそういう逆説的な存在なんだよという以外にない。何の役に立たないし、だれが聞いてくれるわけでもないし、だれがそう信じてくれるわけでもないし、どこに同志がいるわけでもない。だけど、死ぬまでは一歩でも先に進みたい。人間てのは悲しいねえ、という感じが僕はしますね。人間というのはそういう存在なんじゃないでしょうか。親鸞が「唯信鈔文意」や「自力他力事」を書き写して弟子たちに送っていたのは、人間として少しでも先に進みたいという強い願望があったからではないか。いわゆる教育、問題解決のためではない。自分の考えをほんとうに理解してくれる人がだれ一人いなかったとしても、人間はそうせざるをえない。だから親鸞もそうしたのだろうというのが、僕の理解のしかたですね。

(p.11)

「自分の考えを深める」ということ、言い換えれば「理想を願望するもうひとりの自分」に近づこうとすること。それはもちろん否定されるべきことではない。でもそれは、どうしようもなくやっしてしまうことで、ほんとうは「目的なんて何もない」。そこで挙げられている親鸞最晩年の「唯信鈔文意」の末尾にもあるように、「仏教の言葉の意味もわからず、教えについてもまったく無知な」人々に字義をやさしく説き、啓蒙をはじめながら、親鸞は我知らず仏教思想の未知の突端にまで突き進んでいきます。当時も今も、それをまともに受けとめる人が誰もいないようなところまで。

「何の役にも立たないし、だれが聞いてくれるわけでもないし、だれがそう信じてくれるわけでもないし、どこに同志がいるわけでもない。だけど、死ぬまでは一步でも先に進みたい」——でもその一方で、これは吉本さんが他の質疑応答で叙べられていることですが(50)、親鸞は書簡で「死んだら浄土でお会いしましょう」と書いている。親鸞は浄土というものを実体として信じていたわけではない。ではなぜそんな「虚偽」をしるしたのか。それが民衆の「普段言葉」であって、それとの「橋を架ける」ことが当為としてあったからです。そのことを同時にしていなければ、いくら思想の最尖端に突き進んでも意味がない。もしかしたら吉本さんが親鸞から学んだ最大のことはいくらだったのかも知れません。

「人間てのは悲しいねえ」という言葉が、吉本さんからふと洩れた呻きに聞えてきます。

### 三

仏教における存在論は、生成論でもある。どこからはじまるかはべつとして、まず生成の過程があり、存在は後からできるという考え方が根本にある。そこでは、近代的な思想のすべてがひっくり返ってしまうわけです。近代的な思想では大なり小なり個別的な人間性、人間の内面性を見る。ここでは、人間の内面性と、死への無限性、思考の無限性を認めなければ思考は

成り立たないだけでなく、実際にはそんなことはない。古代仏教の思想においては、まず生成過程があり、存在はそのなかでできていく。そういう考え方だから、できてきた人間がどう考えるかなんていうことは、末の問題にしかすぎないわけです。(略)

仏教において、個の問題なんていうのはまったく末の問題です。みなさんは個である以前に現世的な存在ですから、今ここにいたいのが生成の問題にかかわります。親鸞は、今ここにいる存在は仮りの姿にすぎず、人間は死にもしなければ生きもしないといっています。まづ生成過程があり、そこから人間が出てきた。そういう考え方ですから、人間から個がいかかにして出てきたかというのは末の末の問題です。

(p.20)

これは「親鸞の教理について」(一九八〇年)からですが、その前段には「吉本さんの云う」日本的とはいったい何なのか」という質疑があり、そこでは「人間が死ぬということはすなわち、無機的自然になってしまうことなのか。アジア的な宗教ではこれをたんに死と呼ばずに解脱、如来、悟り、浄土などという。親鸞の自然というのは、仏教の本質じたいをさしている。そこでは親鸞的な解釈のしかた、受け取り方をしているよという意味で、日本的、日本人的であると申し上げたわけです」と応答される。その次の質疑が自然と個体に関するものだったので。

吉本さんはいきなり、「生成は存在に先んずる」という、近代を超えるための思想のメルクマル

を、仏教思想の本質にもともとあるものとして打ちだします。そこからすれば近代思想の云う個体などというものは「末の末の問題」なのだ。アジア的ということと、日本的ということは、相当部分において重なりながら、「今ここにいる存在は仮りの姿にすぎず、人間は死にもしなければ生きもしない」という、いまだ誰も展開しえていない、「近代的な思想のすべてがひっくり返ってしまふ」未知の思想につながるはずなのだ。それはどうということなのでしょうか。

これは僕固有の現在にたいする考え方も知れませんが、近代西欧の思想が一種の世界思想だった時代と現在では、ひとつちがう点があるように思うんです。かつては西欧の思想を世界思想とみなし、これによって世界におけるあらゆる現象を解釈、理解できると考えた。しかし現在においては西欧のみならずアジア、オリエント、第三世界などの問題までが同じ平面上に並んでしまっている。文化人類学や民俗学が対象とする近代以前の社会が、地球にいまだに存在しているわけですが、そういう問題もまた同じ水平線上に並んでしまったわけです。これは現在の非常に大きな特徴のような気がします。

かつては西欧だけを主体に考えて、西欧の先進的な地域をモデルにすれば、世界を裁断できると考えられていた時代がありましたけど、現在では未開まで含めて、世界中のさまざまな考え方が同一の視野に並んでできてしまった。僕はわりと、現在のこのような特徴をどこでつかま

えたらいいのかということを考えているんですが、いまだによくわからない。とにかくこれは非常に大きな課題になっているわけですが、少なくともアジア的な考え方と西欧の非常に先進的な考え方という二つの軸を、同時的、同一的に使えないと、現在というのはわからないんじゃないかなという考え方が僕のなかにあります。

(1986)

一九八一年の良寛についての講演後の質疑応答ではこのように語られます。二度の世界戦争、ファシズム、スターリニズムの惨劇をへて、それをもたらし根本にある西欧思想は、すでに「世界を裁断できる」ものではなく、深い危機にあることを露わにしていました。第二次大戦後の世界に巨大な影響をあたえつづけた実存主義のサルトルは前年に亡くなり、「一方で理解しているだけの知識人がおり、「巨大で陰気な集団」であるだけの労働者階級があり、ただ生活しているだけの生活者があり、政治運動であるだけの運動家がある」(吉本『世界認識の方法』(八〇年)でのサルトル批判)、そこに「有無をいわさぬ牽引力」(同書・サルトル『方法の問題』からの引用)でスターリニズムが侵入してくるという構図の時代は、冷戦期の一つのエピソードとして急速に去りつつありました。

《いま、〈アジア〉が、世界史のなかにせり上りつつあると感じます。》(同書・「世界史のなかのアジア」)

サルトルが歿した直後に、吉本さんはこんな印象的な発言をしています。「現在においては西欧のみならずアジア、オリエント、第三世界などの問題までが同じ平面に並んでしまっている」そのことに気づくことの重要性が迫り出してきていたのです。

先の「生成は存在に先んずる」という言も、そんな場処から発せられたものだと思われたい。これには前ソクラテス期のギリシア思想で異端とされた「万物流転」の哲学者ヘラクレイトスの遠い先例があり、それに着目したのが「ギリシア人の悲劇時代における哲学」（一八七三年頃の草稿）を著した若いニーチェでしたが、ギリシアより遙かに先んじて、アジア的思想としての仏教は、「生成」の思想を構築していたのです。その系譜のなかに親鸞がおり、良寛がいる。吉本さんの日本仏教への関心は、「存在」を中心に発展してきた西欧思想——ここでは「生成」さえも「生成という存在」であり、存在に「内在」して流れるもの、存在を「超越」して溢れるものへの関心は抛棄される——からの大きな価値転換の試みを意味したとも云えるでしょう。

同じ応答の直前の部分では、次のようにも語られます。

僕らは西欧の思想を一種のモダニズムとして受け入れてきたものだから、古典論・古代論を欠いている。モダニズムでは、数千年に及ぶ歴史の進歩の過程を無用の長物とみなす。われわれは知らず知らずのうちに、モダニズムに支配されてきた。古代から現在にいたるまでを未開



の段階、過ぎ去った段階として捉えるのではなく、古代にたいする観点をきちんとつくりあげるといふことも、僕の普遍的な関心のなかにあります。

(p.85)

ここから吉本さんの最後の思想の展開がはじまると云っていいぐらいなのですが、それが何でもない聴衆の一人の質疑への応答として語られていたのです。

#### 四

しかし大衆の像は、たえず変わってきています。僕がそのことを初めていったり書いたりした時と較べて、「大衆の原像」はまるでちがってきている。ですから、具体的にはたいへんちがったふうを考えていかなければいけないのですが、「大衆の原像」という考え方はたいへん変わらぬ。大衆という概念と対応しながら、人間・主体という概念がどう変わってしまったのかということがたいへん問題なわけです。僕は構造主義の考え方はたいへんみごとなものだと思っただけで、どうも自分はその場所には行けないような気がする。自分なりにさまざまな位置づけをするんですが、それとはちがうような気がするんです。

では人間・主体はもはや存立しえないという構造主義の考え方は、僕の考え方とニュアンス

的にどこがちがうのか。現在の段階では、主体・人間という概念も、人間主義ヒューマニズムという概念も、非常に危なっかしくなってきた。僕自身もそう思っているし、それについてはちっとも異論はない。しかし僕はその一方で、主体あるいは人間という概念がなくなっても、その骨格として、内容という概念が残るような気がするんです。内容がどうということではなく、とにかく内容じたいはなくならない。構造主義においては主体が飛んでしまうと考えるから、内容もまた飛んでしまうと理解しても一向にさしつかえないようになっていく。社会主義への理解でもそうですね。しかし僕は、内容じたいはどうしてもなくならないような気がしてしょうがないんです。内容はどこまでもつきまとう。内容の意味はみんなすっ飛ばされちゃうけれども、内容じたいはなくならないんじゃないか。そこにかんしては、どうしても構造主義的な考え方になじめないなと思ってるんですけどね。

(p.34)

これは一九八三年の「変容論」（原題「親鸞論」）からで、質疑は「大衆の原像」をたえずくり込むことを当為としてきた吉本の思想の現在と、ミシェル・フーコーなどの構造主義とはどこが共通し、どこからが異うのかを問うものでした。

吉本さんの応答は先ず、大衆の像イメーჯが大きな変容にさらされていることの重要性と、にもかかわらず「大衆の原像」という考え方がいいは変更する必要がないということ。そのうえで構造主義にた

いする共感と異和が語られます。「現在の段階では、主体・人間という概念も、人間主義という概念も、非常に危なっかしくなってきた。僕自身もそう思っているし、それについてはちっとも異論はない」。でも主体・人間という概念がなくなっても、「内容」という概念は残る。それを棄却してしまうのはおかしいのではないか。「内容はどこまでもつきまとう。内容の意味はみんなすっ飛ばされちゃうけれども、内容じたいはなくならんじやないか」。「内容」という平易な言葉で、吉本さんは何が云いたかったのでしょうか。

この当時、実存主義に替わる思潮としてフランスの構造主義があり、わがくにでもブームとなっていました。その最大の思想家がフーコーで、来日時の一九七八年には吉本さんと、前掲の『世界認識の方法』に収められる対話をしています。八四年にフーコーが亡くなったときには、吉本さんは「現存する世界最大の思想家の死」と最大級の悼み方をし、「かれはわたしたちのあいだに、「人間」は現実のたくさんの具体的な物の秩序のなかに、目立たないようににはさまった裂け目にすぎず、いまから二世紀ほどまえにはじめて生みだされたもので、やがてもうすこし新しい考え方がみつければ、そのうちに消えてしまうものだということを、目のさめるように鮮やかに啓示した」と叙べます（「ミシェル・フーコーの死」）。吉本さんの考えは、フーコーがもたらした人間主義の解体、主体の消滅という啓示に共振しながら、さらにその先にひきしぼられていきます。そこから洩れた言葉が「内容じたいはどうしてもなくならない」だったのではないのでしょうか。

フーコーの死後、その盟友だったジル・ドゥルーズは孤立を深めていき、健康状態の悪化と相俟って、九五年に自殺します。「内在——ひとつの生……」は、その直前に発表された思想的遺書と云っていい文でした。

《純粹な内在とは、ひとつの生、それ以外のなにもでもないといえよう。純粹な内在は生への内在ではなく、何かのなかにあるわけでもない内在的なものが、それ自体ひとつの生となる。ひとつの生は、内在の内在、絶対的な内在。それは力、まったき至福。》（小沢秋広訳・傍点原文）

ドゥルーズは人間的主体が散乱し消滅した後にも、一つの生としての内在、力としての内在が残る、それが重要なだと云っているようです。この「内在」という言葉が、私にはその十数年前に吉本さんが語った「内容」と重なって聞えてきます。

吉本さんはフーコーとの対話で、「概してぼくなどが現にもっている世界のなかでの孤立感みたいなものを、なしですますような気がする」と問いかけていました。フーコーが「世界のなかでの孤立感」と無縁であったはずはありませんが、そこでの彼の応答は、共産党のヘゲモニーから離脱した人々の闘争における孤立に還元し、「我々は外部におり、そうした人たちがこそが闘争の暗く孤立した側面を実質的に扱っている」といったものでした。

このすれちがいには、通訳の問題もあったのでしようが、本源的な孤立こそが吉本さんを、「内容」として、あるいは「力としての内在」として、とぎれることなく「自己表出」に衝き動かして

いること、そのことを共有するまでの時が熟していなかったというほかないだろうと思います。我々は「外部」にいるのではなく、存在に「内在」しているのであり、そのようにしてたえまなく「生成」しているのだ。さまざまな環境と条件のちがいを承知のうえで云えば、吉本さんの孤立は、それによってこそ、知的エリートたちのつくる狭い世界から脱け出して、「外部」とつながり、生き延びることができたのだと思います。

## 五

このように吉本さんの語り言葉には、その簡明さのなかに、現代思想の未知の尖端と、何でもない民衆の変容する生の現在を橋渡しする、多様な文脈がこめられていると思います。それにとこまで感応できるのかは、それこそ読む人の「面々の御はからひ」（『歎異抄』）に属することでしょうが、そこで直観が研ぎ澄まされる場面に立ち会うことは、その人の生に確実に影響をあたえるはずですし、私もまたそのようにして影響されてきました。

ここではその一部にふれたにすぎませんが、この巻に収められた七七年から九三年にいたる質疑応答には、これからを生きるためのヒントが、星座のようにばら撒かれているはずだと思います。

（つきやま・とみお／詩人・批評家）

刊行)。講演集『白熱化した言葉』長篇詩集『記号の森の伝説歌』。鮎川信夫歿。島尾敏雄歿。87年『夏を越した映画』講演集『超西欧のまで』『吉本隆明全対談集』全12巻(89年完結)。88年、イベント記録『いま、吉本隆明25時』。キリスト教論集成『〈信〉の構造②』。89年、昭和天皇歿。天皇制・宗教論集成『〈信〉の構造③』『ハイ・イメージ論Ⅰ』『言葉からの触手』、シンポジウム記録『琉球孤の喚起力と南島論』『宮沢賢治』『像としての都市』。「ベルリンの壁」崩壊。三浦つとむ歿。米ソ冷戦終結。90年、湾岸戦争起こる。『ハイ・イメージ論Ⅱ』講演集『未来の親鸞』『ハイ・エディプス論』『柳田国男論集成』。91年『情況としての画像』。ソ連崩壊。92年『甦えるヴェイユ』『見えだした社会の限界』『大情況論』『新・書物の解体学』。93年『追悼私記』『世界認識の臨界へ』。94年『背景の記憶』『ハイ・イメージ論Ⅲ』『思想の基準をめぐって』『情況へ』『現在はどこにあるか』講演集『愛する作家たち』。95年『マルクス読みかえの方法』『わが「転向」』『なぜ、猫とつきあうのか』。阪神大震災・オウム真理教事件起こる。谷川雁歿。講演集『親鸞復興』『余裕のない日本を考える』『超資本主義』『母型論』。96年、『学校・宗教・家族の病理』『世紀末ニュースを解説する』『消費のなかの芸』。芹沢俊介との対談『宗教の最終のすがた』。夏、西伊豆の海で游泳中に溺れる。97年、講演集『ほんとうの考え・うその考え』吉本ばななの対談『吉本隆明×吉本ばなな』。埴谷雄高歿。『僕ならこう考える』『思想の原像』。「試行」74号を以て終刊とする。『食べもの話』。98年『遺書』『アフリカの段階について』『父の像』。小川国夫との対談集成『宗教論争』。99年『詩人・評論家・作家のための言語論』『匂いを讀む』『少年』『僕なら言うぞ!』『私の「戦争論」』『背景の記憶』。江藤淳自死。2000年『写生の物語』。『吉本隆明資料集』刊行開始(17年4月現在第164巻まで刊行)。『超「20世紀」論』。『吉本隆明が語る戦後55年』全12巻刊行開始(03年完結)。01年『幸福論』『日本近代文学の名作』『心とは何か』。吉本資料発掘者の川上春雄歿。ニューヨーク同時多発テロ事件起こる。『今に生きる親鸞』『読書の方法』。02年『吉本隆明のメディアを疑え』『老いの流儀』『超「戦争論」』『夏目漱石を讀む』(小林秀雄賞)『ひきこもれ』。03年『日々を味わう賢沢』『現代日本の詩歌』『吉本隆明全詩集』(藤村記念歷程賞)。04年『「ならずもの国家」異論』『人生とは何か』『漱石の巨きな旅』『超恋愛論』。05年『中学生のための社会科』『13歳は二度あるか』。06年『詩学叙説』『家族のゆくえ』『老いの超え方』。07年『思想のアンソロジー』『真贋』『心的現象論』『吉本隆明自著を語る』『よせやい』。08年『日本語のゆくえ』『「芸術言語論」への覚書』『貧困と思想』。09年『吉本隆明全マンガ論』。宮沢賢治賞受賞。9月、岩手・花巻での受賞記念講演が最後の講演となる。10年『ひとり』。11年、東日本大震災・福島原発事故起こる。江藤淳との対談集成『文学と非文学の倫理』。12年『吉本隆明が語る親鸞』。3月16日逝去。享年87。講演集『宮沢賢治の世界』。妻・和子歿。『第二の敗戦期』『吉本隆明が最後に遺した三十万字』。13年『フランススへ』。ハルノ宵子との共著『開店休業』。14年『吉本隆明全集』全38巻(別巻1)の刊行開始(17年4月現在第12巻まで刊行)。『吉本隆明〈未刊行〉講演集』全12巻(15年完結)。『「反原発」異論』。16年『アジア的ということ』『全南島論』。

吉本隆明（よしもと・たかあき／りゅうめい）

1924年11月25日、東京・月島に生まれる。父祖の地は九州・天草。37年、日中戦争始まる。40年頃より詩作を始める。41年、太平洋戦争始まる。42年、山形・米沢高等工業学校に入学。この頃より敗戦後まで後に『初期ノート』『宮沢賢治論』に収められる草稿を書く。43年、兄・権平が戦死。44年、ガリ版刷りの詩集『草莽』。東京工業大学電気化学科に入学。45年、東京大空襲。私塾の教師今氏乙治戦災死。勤労動員中の富山・魚津で敗戦を迎える。日本はGHQの占領下に置かれる（-52年）。47年、東工大卒業。技術者として職場を転々とする。横光利一歿。48年、姉・政枝歿。太宰治自死。50年、朝鮮戦争始まる（-53年）。50-52年、後に『日時計篇』となる膨大な詩篇、『初期ノート』『戦後篇』に収められる草稿を書く。51年、東洋インキ製造に入社。青戸工場に勤務。52年『固有時との対話』53年『転位のための十篇』を自費出版。54年、同人誌『荒地』の荒地詩人賞に両作が入選。東洋インキ労働組合連合会会長として関わった労働争議が敗北に了る。55年、職を辞する。56年、高村光太郎歿。武井昭夫との共著『文学者の戦争責任』。長井・江崎特許事務所に職を得る。57年、黒沢和子と結婚。『高村光太郎』（58年改稿版）。長女・多子（ハルノ宵子）誕生。58年『吉本隆明詩集』。59年、花田清輝と論争。『芸術的抵抗と挫折』『抒情の論理』。60年、反安保闘争。全学連主流派に加盟し「六月行動委員会」を結成。6月3日品川駅構内での坐り込みに参加。15日国会構内の抗議集会で演説、その後建造物侵入で逮捕される。『異端と正系』。同人誌「近代文学」の近代文学賞を受賞。61年、谷川雁、村上一郎と自立誌「試行」を創刊。62年『擬制の終焉』。63年『丸山真男論』。64年「試行」を単独編集とする。『初期ノート』。次女・真秀子（吉本ばなな）誕生。『模写と鏡』。65年『言語にとって美とはなにか』。66年、編集者岩淵五郎が飛行機事故で逝去。『自立の思想的拠点』『カール・マルクス』。68年、父・順太郎歿。講演集『情況への発言』『共同幻想論』。全国に大学闘争が拡がる。69年『吉本隆明全著作集』全15巻（75年完結）の刊行開始。長井・江崎特許事務所を退職。文筆専業となる。70年『情況』。三島由紀夫自死。71年、母エミ歿。『源実朝』『心的現象論序説』。72年、連合赤軍事件起こる。対談集『どこに思想の根拠をおくか』講演集『敗北の構造』。74年『詩的乾坤』。75年、村上一郎自死。『書物の解体学』対談集『思想の根源から』。埴谷雄高との対談『意識革命宇宙』『吉本隆明新詩集』。76年、対談集『思想の流儀と原則』講演集『知の岸辺へ』『最後の親鸞』。77年『初期歌謡論』。78年『論註と喩』『戦後詩史論』『吉本隆明歳時記』今西錦司との対談『ダーウィンを超えて』。79年『悲劇の解説』『初源への言葉』。80年『世界認識の方法』。81年、講演集『言葉という思想』。小林秀雄歿。鮎川信夫との対談集成『詩の読解』『思想と幻想』（同じく85年に『全否定の原理と倫理』）。82年、西ドイツで起こった反核運動が日本に波及。『空虚としての主題』『源氏物語論』『「反核」異論』。83年、仏教論集成『〈信〉の構造』。84年『マス・イメージ論』『大衆としての現在』。85年、埴谷雄高と論争。『死の位相学』講演集『隠遁の構造 良寛論』『重層的な非決定へ』。86年『吉本隆明全集撰』全7巻（88年までに6巻を

# 吉本隆明 ■ 質疑応答集 ① 宗教

二〇一七年七月二〇日 初版第一刷印刷  
二〇一七年七月二五日 初版第一刷発行

著者

吉本隆明

発行者

森下紀夫

発行所

論創社

東京都千代田区神田神保町二―二三 北井ビル  
電話〇三―三二六四―五二五四 ファクシミリ〇三―三二六四―五二三二 web: <http://www.ronso.co.jp/>  
振替口座 〇〇一六〇―一―一五五二六六

編集

宮下和夫

装釘

宗利淳一

印刷・製本

中央精版印刷

組版

フレックスアート

ISBN 978-4-8460-1611-1 ©2017 Yoshimoto Sawako, printed in Japan  
落丁・乱丁本はお取り替えます。



吉本隆明 ■ 質疑応答集 全7巻

- ① 宗教
- ② 思想
- ③ 人間・家族・死
- ④ イメージ・都市
- ⑤ 情況
- ⑥ 文学 I
- ⑦ 文学 II